

〈翻訳〉

メランヒトン『神学要覧』(1559年)—その4—  
(Loci praecipui theologici.1559) 翻訳

菱刈 晃夫

前回に引き続き、今回は「律法について」から「第二の板について」の前まで、ラテン語テキストからの試訳を掲載する。

(SA Bd.1. 307-331.)

\* \* \*

神の律法について

神の律法とは神から伝えられた教えであり、わたしたちがどのようにあってはならないか、何をしなければならぬか、何をやめなければならぬのかを指示しています。そして、神への完全なる服従を要求しています。さらに、完全な服従を果たしていない者に対する神の怒りと、彼らを永遠の死によって罰することを宣言しています。この定義は神の律法そのものから、さらにキリストによって述べられた多くのことから取り入れられています。というのも、律法は命令と約束を含みますが、それによって律法を満たすことと、同じく威嚇とが付加されるからです。この命令は全体的服従について宣言しています。「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛しなさい」<sup>1</sup>。同じく「隣人を自分のように愛しなさい」<sup>2</sup>。同じく「隣人のものを一切欲してはならない」<sup>3</sup>。威嚇しています。「この律法の言葉を守り行わない者は呪われる」<sup>4</sup>。同じくマタイによる福音書 25 章。「呪われた者ども、わたしから離れ去り、悪魔とその手下のために用意してある永遠の火に入れ」<sup>5</sup> など。

ここで最初に、人間の法と神の法〔律法〕とのあいだには、巨大で無限の違いがあることを警告しておかなければなりません。しかし、人々がモーセの輝く顔を見ることができず、ヴェールを通じて注視したように、同じくすべての人間の精神と目は、神の律法を遠く隔たって見ることとなりますが、その判断がどのような性質のものか理解することはなく、とにかく外的な行いについての教えであると見なすのです。ちょうどフォキユリデスやテオグニスの教訓を思い浮かべるように。しかし、神の律法がより多く伝えられ啓示されているのには、後に述べるように数々の理由があります。それゆえ、わたしたちは神の律法をローマ人の十人委員による十二表法のように考察してはなりません。これは何世紀も前にローマの元老院および演壇とともに消滅しました。しかし、神の律法は神的な精神の永遠かつ不動の規則であり、罪に対する判断なのです。これは人間の精神に刻み込まれていて、しばしば神の声によって告知されます。キリストがこれについていうように。「わたしが来たのは律法や預言者を廃止するためだ、と思ってはならない。廃止するためではなく、完成するためである」<sup>6</sup> など。

したがって、この区別が考慮されなければなりません。人間の法は、ただ外的な行いを命じたり禁じたりするだけなのです。

哲学は多少より多くのことを教えてくれます。すなわち、高邁な行いはただ外的あるいは装ったわざではなく、精神において正しい判断に、かつ意志において自由な選択もしくは正しく行為するための選択 (προαίρεσις) に賛同しなければならない、といえます。したがって、ある種の内的な情念と行為の節制を求めるのですが、それはもともと倫理〔道徳〕(ἠθικός) と呼ばれています。しかし、これは本性による汚れを告発するものではありませんし、第一の板と争うすべての悪徳を裁くものでもありません。つまり、それは神についての疑い、神への恐れと愛を欠いた心、人間の自然の本性のなかに止まる疑念やそれに似た病のことでです。

しかし、神の律法はただ外的な行いや注意深く正義止された情念を求めるだけではなく、それについては哲学者〔アリストテレス〕が語っていますが、わたしたちの自然の本性が申し分なく神に従うこと、神に関する確たる知をもつこと、真実かつ永遠の恐れ、神への確たる信頼、熱烈な愛を命じています。しかし、人間の真の本性はそうではないので、律法の声はわたしたちの本性にある罪を断罪する神の裁きとなります。パウロがこう述べるのは、このことを意味しています。「わたしたちは、律法が霊的なものであると知っています」<sup>7</sup>。つまり、市民的な生活における外的な行いについて命じる単なる政体の知恵ではなく、霊的な活動や、神についての確たる知や、熱烈で完全な愛を要求する、それとは異なる教えであるということです。律法がこういうように。「あなたは心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい」<sup>8</sup>。

しかし、修道士たちは神の律法について、市民的な規律についてのように語ります。神の律法はこうした市民的な規律あるいは哲学を通じて満たされる、つまり、外的な行いや何でも意志的な努力によって満たされると述べるのです。たとえ精神のなかに疑いが、意志や心のなかに多くの邪悪な傾向が止まっているにも関わらず。そして、そうした疑いや邪悪な傾向は罪ではない、と教えるのです。

したがって、彼らは神の律法が満たされると自分たちが思う行いのゆえに、人間は正しくあり、かつ神に喜ばれると創作〔捏造〕します。神による回復と、キリストという仲介者による信仰によって神に喜ばれることにより人間は正しいのだ、とは教えません。しかし、律法に関するこうしたパリサイ人的誤りをパウロは反駁します。神の律法は、こうした弱い人間の本性によっては満たされることも、神の怒りが喜ばせられることも、律法の行いによって罪が取り除かれることも不可能である、と主張します。そうではなく、神の子、わたしたちの主イエスキリストが、これにふさわしい場所ですでに十分に述べたように、罪を取り除き、わたしたちに義と永遠の命を与えるために送られた、と主張するのです。

## 法の区分

まず法の種類を列挙しましょう。神の律法 (Lex divina)、自然の法 (Lex naturae)、人間の法 (Leges humanae) です。神の律法はある時代に神から伝えられたもので、モーセと福

音書の至るところに書かれてあります。自然法は、後に述べるように、神に関する自然の知 (notitia naturalis de Deo)、そしてわたしたちの生き方を制御することに関する (de morum gubernatione) 知、もしくは高潔なものと同様醜悪なものとの区別 (discrimine honestorum et turpium) についての知です。これは数の知〔観念〕が人間の精神に神の力によって植え付けられているのと同じように、人類のなかに神の力によって植え付けられています。したがって、これは神の律法と部分的に一致しますが、それは後に明らかにするように、道徳と呼ばれています。ゆえに最初に神の律法の種類が区別されなければなりません。

たとえ世の始まりからずっと神の教会で律法の声と恩恵の約束の声が鳴り響いていたにせよ、それにもかかわらず、確かな思慮によってイスラエルの政体が建設されたとき、神の律法が公表されました。というのも、神は国民と証言の公示によって、創造の際に人間の精神の内に置かれた知を明らかにすることを欲したからです。そのことで罪に対する自らの判断を示そうとしたのです。しかしながら、全政体が建設されてしまっていたので、ただ個人の道徳〔生き方〕に関する法が示されただけでなく、公共〔市民〕や儀式に関する法も付加されたのです。

したがって、モーセの律法全体には三つの部分があります。道徳法、儀式法、そして公共〔市民〕あるいは裁判法です。そして、この区別は入念に考察されなければなりません。というのも、たとえモーセの政体がすでに滅びているにせよ、それにもかかわらず律法の区別は考慮される必要があるからです。モーセの儀式法と市民法は他の国民には命じられていませんし、わたしたちを縛るものでもありません。これはその当時のイスラエルの人々に伝えられたものであり、その政体を確実な時間存続させるためのものでした。そのなかでキリストが生まれ、自らを明らかにし、公言し、犠牲となり、そして公然と永遠の生命に着手するためでした。

しかし、律法には他の部分があり、それは道徳法と呼ばれています。これは永遠なる神の意図 (sententia) であり規則 (regula) であり、時間によって変えられることは決してありません。常に永遠に神はこの考えを欲しています。つまり、被造物が神を愛し畏れること、理性的な被造物が敬虔であることを。しかし、道徳法には精神における神の認識や、神への心の服従や、正しさや、貞潔や、真実や、節度といった人間への徳について命じているものもあります。しかし、道徳法の優れたものは、同時に神の驚くべき考えによってひとつの小さな板のなかで表現されています。それは十戒 (Decalogus) と呼ばれています。したがって、道徳法を表したいと望むとき、十戒と名づけるのは普通のことであり、それは巧みに言葉の争い (λογομαχία) なく理解されなければなりません。かくして道徳法は存在し、後にそれらについて述べるように、それは十戒のなかに保持されています。そして十戒の要点の繰り返しや説明は、預言者や使徒の書の至るところで読むことができます。これは神の精神による永遠の規則 (aeternae regulae mentis divinae) なので、モーセよりも前でさえ、教会のなかで常に響き渡っています。そして、これからも常に止まり続け、すべての異邦人にも及んでいるのです。ところで、公共市民や儀式の法のなかにも自然のものがたくさんあります。それは、依然として永遠のものなのですが、近親相姦の習慣を禁じているような法のことです。レビ記 18 章にあるように<sup>9</sup>。というのも、家系を敬うことがこうした徳に属するからです。そこで神は、カナン人はその不

浄な情欲のゆえに滅ぼされるとははっきりいったのです。したがって、異邦人はモーセの法が公示されるよりも前から、こうした恥ずべき行為のゆえに咎められているがゆえに、永遠の神の律法と自然の判断によって有罪を宣告されることは確実なのです。

## 十戒の説明

十戒について熟考すること (meditatio Decalogi) は、もっとも有用かつ有益です。というのも、そこには決して十分に考察され、決して汲み尽くされないほどの豊富で崇高な教えが湛えられているからです。神の律法が満足させられると妄想したり、それどころかそのうえにより善きことがなされうると付加するような者たちの狂乱は、呪われてしかるべきです。これは人間による声ではなく、悪魔によって撒き散らされた声なのです。こうした冗談によって悪魔は、人間の尊厳と清澄さから、その墮落へと騙して連れて行こうとして戯れているのです。というのも、そこへ向けて人間の本性が作られているところのものを、神がこの律法のなかに明らかに示したとき、そこからわたしたちは墮落してしまいました。何という悲惨と暗闇のなかに凋落してしまったことか。まるでわたしたちと戯れているかのような悪魔は、神の律法をおとしめる皮肉な冗談に満ちた声を撒き散らしているのです。したがって、敬虔な者は、こうしたパリサイ人的で修道士的な誤りが軽くはないことを知るので、神の律法をより近くで吟味することを妨げるような、わたしたちの心のなかの帆が取り去られるように、神に祈りましょう。神の声をはるかに多く含んでいるものがあることを真剣に考え、そのすべてが把握されることができるよう。

ところで、まず律法について次の四点が考察されなければなりません。

第一に、律法は人間の本性が何に向けて作られたのか、またそのように作られたもののなかで、人間の尊厳と清澄がどのようなものであるのか、思い出させてくれます。というのも、人間の本性は、ここで律法が記しているように、次のようであったからです。つまり、神を完全に知り、常に神を賛美し、常に神に従い、常にすべての行いにおいて神の現前と指導とを考慮し、すべての行為において正しい秩序に従い、何ら邪悪な欲望もなく、何ら損失もなく、死ぬない状態です。

第二に、律法はわたしたちに現在の悲惨を教えてくれます。というのも、今ではわたしたちはその本性が最初の尊厳ある状態から墮落して律法と争い、暗闇と神への軽蔑に溢れ、秩序なく、あらゆる種類の邪悪な欲望で一杯である様子を見るからです。そこで、罪とは死と際限なき災難の原因なのです。それにもかかわらず、真の恐怖あるいは罰のなかで、罪に対する神の怒りを認識する場合を除いては、わたしたちは今の自分たちの悲惨さを理解せず、律法に真に耳を傾けることもしません。これによって多少わたしたちは神の律法と人間の悲惨を理解し始めます。もし神がわたしたちに報いるために罪を罰しようとするのであれば、神の怒りにわたしたちは耐えられない、とダビデが嘆くように。「主よ、あなたが罪をすべて心に留められるなら、主よ、誰か耐ええましょう」<sup>10</sup>。認識されるよりもわたしたち個人のなかには、もっと多くのたくさんの罪があるのです。さらに、強調してこういわれていることに注目しましよ

う。「誰が耐ええましよう」。人間の没落に耐えられるほど強靱な者は、だれもいません。これは罪への罰なのです。ちょうどダビデが自らの姦通の罰を味わうように。息子の殺害、息子の反乱、不道德で不浄な結婚、追放、市民の殺戮、そしてその他の際限ない悪による罰を。こうしたものによる罰のなかで彼はこの小さな一行を学んだのでした。「誰が耐ええましよう」。そして、それにもかかわらずこの今の悪は、永遠の罰とは比べものになりません。したがって、わたしたちは何度もこの小さな一行を声高に繰り返すのです。主よ、あなたが罪をすべて心に留められるなら、主よ、誰が耐ええましよう」。罪に対する神の怒りは本物であり比較しようのないものであると考えましよう。律法を見つめ、すべての律法と争うわたしたちの不潔さを認識ましよう。人類に対して置かれている罰の巨大な塊が、どのようなものか考えましよう。自分たちと共通する没落を見つめ、神に祈りましよう。だれも耐えることができず我慢もできない怒りが宥められますように。もし、神がそれを行使すれば、人間は今と永遠の罰のなかに倒れ落ち、滅びなければなりません。そのように、詩編の同じような詩句が、わたしたちに対して律法の真の理解、わたしたちの罪および神の怒りと罰の認識について、警告しています。

第三に、律法は密かにわたしたちに人類の回復と永遠の生について教えてくれます。同じく、再びどれほどの卓越性へと導かれるのか暗示しています。というのも、神は人間の本性が墮落した後も律法の声を繰り返しているからです。それは神が将来いつか確かに律法が満たされるのを望んでいるからなのです。したがって、人類の回復が将来においてあり、永遠の生があることとなります。というのも、この世の生においてわたしたちは律法が満たされるのを見ることはないからです。しかし、回復に関する教えは、約束のなかに明確に差し出されています。

第四に、このように罪によって圧倒された人類の悲惨さがどれほどのものか、それに対する神の怒りと死とを考察するとき、わたしたちは律法の声というものが、神の意向であり、綱であり、証人であり、その計り知れない怒りの使者であることが分かります。わたしたちは常に真っ直ぐに神の子を見つめ、このいえにえのことを思いましよう。神の子は、ひとりでわたしたちのために怒りに耐え、律法の重荷を耐え忍び、父に喜ばれたのです。そこで、わたしたちは父の子という恩恵のことを思いましよう。これは罪の上にほとばしり溢れるのです。さらに、わたしたちは神の子自身により、再びわたしたちのなかで律法に記されているこのような純潔さへと回復が開始されるよう、呼ばれていることを知るようになりますが、これについては後の場所で示すことにしましよう。

## 十戒

二つの板があります。その第一の板には、それによってわたしたちが神と直接的あるいは本来的に関係するわざ (opera) が含まれています。すなわち、神を内的かつ外的に礼拝することに関する重要事項です。第二の板には、人間に対するわざが含まれています。とはいえ、それは人間社会の鎖〔きずな〕(vincula) です。それにもかかわらず、さらに神の礼拝がここではなされることとなります。というのも、神は自身の言葉によって命じ、もし神の命令によってわざを行うのなら、それが礼拝であると述べているからです。イザヤが第1章で<sup>11</sup>、同じく第54

章で<sup>12</sup>、そしてサムエルがいうように。「主が喜ばれるのは、焼き尽くす捧げ物やいけにえであろうか。むしろ、主の御声に聞き従うことではないか」<sup>13</sup>。ホセア書6章。「わたしが喜ぶのは、愛であっていけにえではなく、神を知ることであって、焼き尽くす捧げ物ではない」<sup>14</sup>。そしてキリストは、隣人に対する愛の掟は第一の戒めと同じであると述べています<sup>15</sup>。つまり、神は必要な服従を求めているということ、ちょうど最初の掟に従うことが必要とされているのと同じように、神を真に礼拝するということがどのようなことか、さらに命じられているすべてのわがが第一の掟に帰着していること、また個人のなかで定める目的がまず第一に、神への服従と栄誉が示されるように行われなければならないことをわたしたちは学ぶように、こうしたことが考察されなければなりません。というのも、神を礼拝することは神によって命じられたわがであり、それは第一に神への服従と栄誉が示されるように、そうしたことを行うことだからです。さらに、こうした信仰によってキリストを認識してこれを行うことであり、そのことのゆえに父に喜ばれることになるわけです。ちょうどベトロが霊的ないけにえを差し出すことを命じたように、わたしたちはイエス・キリストを通じて神に受け容れられるのです<sup>16</sup>。

## 第一の戒めについて

最初の掟は、最高で最重要であるわがについて命じていて、すなわち神の真の知、神への真の完全な服従、申し分のなき畏れ、信頼、神への愛について命じています。ところで、二つのもっとも重要な事柄がここに含まれていますが、それは神認識の仕方と真の礼拝です。神を認識する方法は、その言葉と証言によります。というのも、神は目には見えないため、神について何らかの証言が存在することが必要となるのです。この証言を通じて神は認識され把握されるのです。その結果、世界の活動を注視する人間の精神は、神という作者について考えるのですが、しかし、異邦人やイスラム教徒ももつような、こうした観念ではまだ不十分です。しかしながら、これは実は多くの人々から悪魔によって追い払われてしまっています。しかし、神がまさにそこにいるにしても、それにもかかわらず、造物主である神はわたしたちのことを気遣っているのかどうか、祈りを聞いてくれているのかどうか、このように崇拜されることを欲している真か、どのように崇拜されることを欲しているのか、といった疑いは残ります。ここで神の言葉と証言とが必要となるのです。そこで確かな言葉と証言とが置かれることとなります。「わたしは主、あなたの神、あなたをエジプトの国、奴隷の家から導き出した神である」<sup>17</sup>。したがって、人間の精神はここに神が存在すると判断します。それはシナイ山での言葉を与えることで自らを明らかにした神であり、自身があなたの神であることを公言した神であり、つまり、あなたのことを気遣い、見つめ、裁き、守り、罰する神なのです。

さらに証言が付け加えられますが、それはエジプトから連れ出されたときの人々の、すなわち輝かしい解放と防衛です。したがって、たとえ神が不可視であるにしても、それにもかかわらず人間の精神はここに真の神がいることを認識するのです。それは自らの言葉と感嘆に値する証言のなかで自身を明らかにし、どのように崇拜されるのを欲しているのか示しています。このように最初はアダムに楽園のなかで言葉が与えられ、全自然界〔自然の全事物〕が置

かれることになりましたが、それはすべて神について証言するものでした。しかし、その後に墮罪したとき、罪の赦しを巡り慰めが必要となります。したがって、他の言葉、すなわち恩恵の約束が加えられることになり、しるしはさらに加わり、神聖ないけにえの火によって駆り立てられます。このようにわたしたちにも同じ福音の言葉と確かな証言が与えられています。すなわち、神の子の十字架と復活についてです。ここでわたしたちが父が明らかにされます。この子を認識することでわたしたちは永遠の父に呼びかけるようになります。それは子のなかに自らを現す神であり、ヨハネによる福音書1章でいわれている通りです。「いまだかつて、神を見た者はいない。父のふところにいる独り子である神、この方が神を示されたのである」<sup>18</sup>。同じく「わたしを見た者は、父を見たのだ」<sup>19</sup>。さらに同じくマタイによる福音書11章。「父のほかに子を知る者はなく、子と、子が示そうと思う者のほかには、父を知る者はいません」<sup>20</sup>。子を通じて父は喜び、子のゆえに祈りを聞いてくれるのです。キリスト自身がヨハネによる福音書16章で述べています。「あなたがたがわたしの名によって何かを父に願うならば、父はお与えになる」<sup>21</sup>。ゆえに、わたしたちはこの子が神であると決定します。神は子を与えることで自らを現しました。子は犠牲となり、蘇り、そして伸介者、仲裁者、助力者、そして救済者として送られたのです。同じく、神はこの子によって罪の赦しと永遠の生命に関する福音をお与えになったのです。

福音が与えられることを通じたキリストへの信仰によって、こうした永遠の全能の父を認識する祈りは、真の教会における祈りとすべての異教徒の祈りとを区別します。ゆえに、何度も精神は神に向かって叫び、神を呼び求めます。それは、十字架につけられ復活したわたしたちの主イエス・キリストの父であり、信仰によってこの子を通じて与えられた福音のことを思うのです。「あなたがたがわたしの名によって何かを父に願うならば、父はお与えになる」<sup>22</sup>。神を知るこうした方法を、パウロはしばしばわたしたちに勧めています。コリントの信徒への手紙一の1章。「世は自分の知恵で神を知ることができませんでした。それは神の知恵にかなっています。そこで神は、宣教という愚かな手段によって信じる者を救おうと、お考えになったのです」<sup>23</sup>。同じく至聖所に入る大祭司キリストについての教えも同様のことを教えています。残された人間たちは目に見えない神を知りませんが、ただ神の子のみが、この神秘の至聖所へと踏み込むのです。したがって、神に近づこうとするわたしたちは、キリストのことを、わたしたちを父のところへ引き連れて、わたしたちの祈りを伝えてくれる大祭司として認識することになります。ヘブライ人への手紙でいわれているように「[大祭司キリストの] 恵みにあずかって、時宜にかなった助けをいただくために、大胆に恵みの座に近づこうではありませんか」<sup>24</sup>。神が正しく呼び求められるために、人はこのように神を認識する方法を教えらるる必要があります。

ところで、ここで命じられている礼拝とは、神の認識であり、神の言葉を信じることであり、真の畏れであり、真の信仰もしくは信頼と真の愛のことです。というのも、こういわれるとき神は畏れを求めているからです。「わたしは熱情の神である。わたしを否む者には、父祖の罪を子孫に三代、四代までも問う」<sup>25</sup>。同じく「あなたの神、主を畏れ、主のみに仕え、その御

名によって誓いなさい」<sup>26</sup>。わたしはあなたの、全能の神であり、あなたのことを気遣い、世話し、守り、救う神であるなどといわれるとき、信頼と愛を求めているのです。同じく「わたしを愛し、わたしの戒めを守る者には、幾千代にも及ぶ慈しみを与える」<sup>27</sup>。同じく「あなたは心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい」<sup>28</sup>。というのも、こうした言説は、どこで読まれようとも、第一の戒めの解説だからです。

ところで、この戒めが完全な服従を求めていることは、申命記6章の言葉で明らかにされています。「あなたは心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい」<sup>29</sup>。したがって、これは恐れ、信頼、そして神への愛をすべてに勝って求めている、こうした徳が純粹で光り輝き、そして完全であって、邪悪な情欲と混じり合わないことを求めているのです。しかし、こうした完全な服従を、人間の本性のこの腐敗が引き起こすことは不可能です。魂のなかには神の怒りと憐れみに関する疑いが止まっています。だれもそうあるべきように神を畏れることはありません。だれもそうあるべきように愛に燃えることはありません。そして、多くの墮落した情欲と混ぜ合わされているのです。したがって、パウロがいう通り「肉の思いに従う者は、神に敵対して」<sup>30</sup> いるのです。神への敵対と呼ばれても、簡単にこの悪を理解することはありません。したがって、律法はこの本性の腐敗のなかで、常にすべての人間を告発し断罪しているのです。というのも、完全な服従はないし、また生じさせることもできないからです。

さて、ある者はこういいます。それでも、神に喜ばれる者たちは、この律法を行うことが必要である、と。私はこう答えます。まずキリストと福音を認識することなしに、これには着手しえない、と。というのも、律法はすべての者たちを告発し断罪するからです。そこで、わたしたちは自分が罪人であり、この律法に対する不服従で一杯であることを認識するのです。したがって、わたしたちの心は神から遠ざかり、神を愛することなく、神から善きものを冀おうとしなくなります。しかし、福音を聞くことで、わたしたちの罪がキリストのゆえに赦され、恩恵の内へと受け容れられ、神の子とされ、それにふさわしくないにもかかわらず、そのようにされることを認識するとき、神の現前と憐れみの認識によって、わたしたちは神を助けを求め、自身を神に差し出し、神を畏れ、神の憐れみの約束を信頼し、無関心ではなく、むしろわたしたちのことを気遣い救う父を愛し始めるのです。こういわれているように。「わたしは主、あなたの神」<sup>31</sup>。ゆえに、キリストの認識によって戒めは開始されるのです。次いで、服従はより強力にならねばならないにしても、それにもかかわらず、この律法を再生した者でさえ決して満たすことはありません。しかし、残っている罪は、それにふさわしい場所で語られるように免除され、キリストという仲介者のゆえに正しい者〔義人〕と見なされます。こう聖書にあるように。「キリストは律法の目標であります」<sup>32</sup>。そして、神の子のゆえになされたこの〔キリストへの〕帰罪によって義人であるとき、たとえそれが完全なものでなくとも、服従の開始は神に喜ばれるものとなります。したがって、再生した者は、律法に従い始め、さらにキリストのゆえに正しい者と見なされ、彼のゆえに残る罪が免除されことを信じることで、これを行うことになるわけです。

さらに、第一の戒めのすべての行いを含む、この二つの言葉のわけ（causa）が教えられることは、益になります。すなわち、畏れと信仰と呼ばれているものです。というのも、たとえ信仰もしくは憐れみへの信頼には必然的に愛が伴うにしても、それにもかかわらず、畏れあるいは信仰と呼ばれているものよりも、愛という言葉は曖昧だからです。ゆえに、繰り返し悔い改めのなかで畏れは経験されなければならず、慰めのなかで信頼が経験されなければならないのです。

第一の戒めの仕事を列挙しました。それは、神の認識、神の言葉を信じること、畏れ、信仰もしくは信頼、神への愛です。これに苦しみにおける忍耐が付け加えられなければなりません。たとえ暴君やその他の者による不正な暴力に苦しめられ、病、死、私有財産の損失など、こうした共通する災難が降りかかるにしても。こうした困難において神は心の服従を求めています。第一の戒めの仕事とは、あらゆる種類の苦しみににおいて神を礼拝することと教会の服従にあります。ちょうど殺害の際のアベルの服従、極刑における殉教者すべての服従、ヨブの服従、家庭における悲劇の際のダビデのように。というのも、第一の戒めに関して明確に記されているから。「わたしについて来たい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい」など<sup>33</sup>。同じく、「神は前もって知っておられた者たちを、御子の姿に似たものにしてしようとあらかじめ定められました」<sup>34</sup>。同じく、「主の慈しみに生きる人の死は主の目に価値高い」<sup>35</sup>。したがって、こうした服従に関する明らかな命令が確かであります。そして神は暴君よりも自身が恐れられることを望んでいます。次いで、神はわたしたちが自身の罰のなかで、神から無視されているという絶望に走らないことを望んでおり、神はわたしたちに慈悲深くあり、出来事を支配しているという慰めを保ち続けることを望んでいます。

他の災難、すなわち共通する災難に関して、こう記されています。「今こそ、神の家から裁きが始まる時です」<sup>36</sup>。したがって、あるいは罰あるいは苦しみにあって、神は教会がこうした苦難に従うことを望んでいます。それは人間の本性が肉に止まる罪のゆえに死の下にあり、教会による数多くの現実的の罪によって罰せられるからです。聖人でさえそうなのです。このようにして神はこうした苦難によって教会が、悔い改め、服従を実行し、信仰を訓練し、神を礼拝し希望をもち、絶望に陥らず、わたしたちが打ち捨てられ見捨てられていると思わないように、そうではなく神はわたしたちに慈悲深くあり、破壊や死を支配しておられる、といったことを思い起こさせられるよう望んでいるのです。これに、共通の災難における際立った服従だけではなく、信仰を通じてしっかりと慰めを保ち続けることを命じている言説が向けられます。「あなたがたはそのように不平を言うてはいけません」<sup>37</sup>。つまり、神による怒りが、まるでわたしたちを冷酷に苦しめるとか、わたしたちを蔑ろにする、とかいうように「不平をいうべきではないということです」。同じく「神の力強い御手の下で自分を低くしなさい」<sup>38</sup>。同じく「神の求めるいけにえは打ち砕かれた霊」<sup>39</sup>。同じく「あなたの道を主にまかせよ」<sup>40</sup>。同じく「ふさわしい捧げ物をささげて、主に依り頼め」<sup>41</sup>。

さらに、どれほど多くの善き行いがこの服従のなかに集中しているか見なさい。それは同時に第一の戒めに属しているものです。第一に、神を見つめる服従はそのものがそれ自体で善い

行いですし、この戒めのなかに、神は暴君よりもずっと恐れられることが命じられています。同じく神から負わされた罰、死やそういったものに耐えることを命じています。こういわれているように。「今こそ、神の家から裁きが始まる時です」<sup>42</sup>。あるいは「裁かれるとすれば、それは、わたしたちが世と共に罪に定められることがないようにするための、主の懲らしめなのです」<sup>43</sup>。この服従に信仰が付加されなければなりません。信仰は神が蔑ろにせず、苦しみのなかに投げ捨てず、そうではなく今までずっとあなたのことを気遣い、あなたに慈悲深くあり、追放の際ダビデがそう感じたように、この成り行きを支配していると決心します。こうした信仰と希望は第一の戒めのなすわざであります。このすべてより忍耐と呼ばれる徳が生じてくることになります。つまり、服従ですが、それはある魂の平安、もしくは服従する意志とともに生じてくるもので、信仰による慰めに起源しています。こうしたすべてをパウロは平和と呼びました。フィリピの信徒への手紙4章。「そうすれば、あらゆる人知を超える神の平和が、あなたがたの心と考えとをキリスト・イエスによって守るでしょう」<sup>44</sup>。つまり、あなたたちのなかにそうした平和や魂の平安がありますように、ということです。その結果、あなたがたが神に従い、信仰による慰めを保ち、魂を強固なものとしめますように。神の約束を見つめ、そのなかで素晴らしい善や神の憐れみによって注目が惹かれて、その反対のものに耐え忍ぶことができ、再び愛が生じてくるように、ということなのです。

## 反論

さて、第一の戒めに対する人類の強情さについて考えてみることにしましょう。それはわたしたちの弱さを知り、この戒めに対する罪の段階をある程度区別することを学ぶためです。まずはエピクロス派と哲学者によるもので、彼らは神がいるかどうか、人間のことを気遣っているかどうか、教会が保つ言葉について、それが神から伝えられたものかどうか、と否定したり疑ったりしています。どこであれ、人間の大多数はそうした人たちであって、彼らは魂からして神についての賛同をすべてすっかり無くしてしまっていて、疑念にふけり、それを強固にしています。したがって、大きな暗闇が最初の親の墮落に引き続き、後にこの暗闇を人間の悪徳が強固にし、悪魔がこれを助長することになります。

罪の第二の段階は、偶像（idola）を崇拜することです。これは数多くの神を捏造し、さまざまな力を個々に割り当てます。ちょうど異教徒たちが、あるいは神の榮譽に帰して、つまりは被造物を礼拝し、死んだ聖人に懇願するように。というのも、こうした礼拝は万能を神に帰しておきながら、あるいは神をある立場に縛り付けるからです。言葉なしに神は何ものにも束縛されることを欲してはいないにもかかわらず。しかし、この世は常に偶像で満ちていたし、今も満ちているのは明らかです。異教徒による聖人礼拝や彫像礼拝と異なっていないのです。

罪の第三の段階は、魔術師です。彼らは神と敵対する悪魔と協定を結び、これに魔術師は助言を求め、他の神がかり的な意見を授けられ、これに神の秩序を欠いた力が帰されることになります。それゆえに、もし何らかの成果がこれに続くなら、悪魔がその主人であり、信頼は悪魔に基づくということになります。こうしたことはすべてレビ記20章で禁じられています。「口

寄せや霊媒を訪れて、これを求めて淫行を行う者があれば、わたしはその者にわたしの顔を向け、彼を民の中から断つ」。<sup>45</sup>

罪の第四の段階は、ユダヤ人、哲学者、異教徒、そしてイスラム教徒によるもので、彼らはみな自分にとっての自分の神を捏造し、ここに神がいることを決して認識しようとは欲しません。この神とは、子であるキリストを通じて自らをこの言葉において明らかにした神であり、とそのときそのように認識され礼拝されることを望んでいるのです。ゆえに、マニ教徒は第一の戒めを冒瀆しています。彼らは、善と悪という二つの神を捏造し、等しく永遠であるといえます。同じくサモサタのパウルスは、キリストのなかには人間の本性だけがあると主張しました。イスラム教徒が不信心にもそう考えるように。アリウス派の人々もこの戒めを冒瀆しています。彼らは神の子が父の実体であることについて、これを否定します。同じく他の者たちは、聖霊が人間のなかで作られた情動であるに過ぎないといえます。

罪の第五の段階は、キリストという仲介者を通じて神を呼び求めるのではなく、むしろ聖人やミサや償いのわざやその他の行いといったものの媒介を捏造する人々のことです。この人々は同じく、神の恩恵について疑うべきであるといえます。

罪の第六の段階は、ユダヤユリアヌスらのように、真の福音の教えから恐怖と嫌悪のゆえに離反した背教者たちです。

罪の第七の段階は、サウルのように絶望に陥った人々のことで、このなかですべての者は絶望へと突進せざるをえません。彼らはキリストにおける信仰から来たる福音を知りません。

罪の第八の段階は、福音を学ばない者たちのことで、彼らは自らをキリストの教えに耳を傾け、これを知るように駆り立てることをしません。天の父がこう命じているのにもかかわらず。「これに聞け」<sup>46</sup>。

罪の第九の段階は、偽善者たちで、彼らは真実を公言し、外的な偶像に汚染されていないにせよ、それにもかかわらず、心には神への畏れはなく、信仰もなく、ちょうどナバルのように、神よりもむしろ自身の喜びや力をより愛するのです。純粋な教えを保つ教会ですら、常に大多数の人々がそうしたもので、種についてのたとえ話が警告する通りです<sup>47</sup>。

罪の第十の段階は、傲慢（superbia）です。つまり、自分の無力を認識することなく、神からの助けを知ることも求めることもなく、自分の力や知恵、才能を賛美し信頼することです。ちょうどアレクサンダーが、このもっとも素晴らしい王国に対する最大に卓越した業績を、自分の計画や戦闘によるものとし、自分の知恵と、自身の強さを喜び、より劣った者たちを侮り押し殺し始め、これほど大きな業績が神からの助けによるものであるとは認識しなかったように。彼は、その人々を罰するために帝国からペルシャを奪い取りますが、後にアレクサンダーが放埒な行い〔専制君主化して〕で罰せられ〔熱病で急逝〕しました。同様のことはネブカドネザルについても記されています。彼は罰せられてこの傲慢を知り、自らを罰します<sup>48</sup>。しかし、センナケリブは同じように誇らしげに自分を信頼し罰せられませんでした。殺害されました<sup>49</sup>。そして、歴史は大部分の英雄の男たちがそうしたもっとも悲惨な転落によって押し潰されるのを明示しています。こうしたことは、彼らが自己賞賛し、人間の無力を認識すること

なく自分への贈り物〔才能〕(donum)を信頼し、そのようにして罪を犯す仕方では、神からの助けを知ることも求めることもないために起こります。彼らは、しばしば危険な状況を引き起こしたり、自分の力に信頼して、個人的な情念から不正なことさえ引き起こしたりします。ポンペイウスがそうでした。こうして彼らは他の悪徳、放縦、軽蔑、他者の抑圧を増し加え、アレクサンダーのようにぬくぬくと暴飲暴食し、最高な賞賛に値する指導者を殺してしまいました。それによって罰が続いたのです。同様のことをアイアスについて詩も表現しています。したがって、ソフォクレスは彼が狂乱によって罰せられるのを記しました。というのも、父テラモンが立ち去る際に、勢いよく戦うのではなく、神から勝利を冀うようにといったとき、アイアスは臆病者でさえ神からの助けによって勝つことができるが、わたしなら神なしにそうしてみせよう、と答えたからです。こうした事例から、なぜ英雄の男たちが過酷な状況によってそれほど打ちのめされてしまうのか、容易に理解されます。そして、こうした傲慢 (elatio) と自己信頼 (fiducia sui) について記されています。「人に尊ばれるものは、神には忌み嫌われるものだ」<sup>50</sup>。しかし、たとえもし英雄的な人の内でこうした悪がより明確に見て取られるにしても、それにもかかわらず、すべての人々はある程度、こうしたものに汚染されています。大多数の人々の信頼のほとんどは、神よりもむしろ、財産、友人、勤勉に寄せられています。こうした病を認識することをわたしたちは学びますが、それはわたしたちが誤りを正して、真の信頼を神に寄せるようにするためです。ダビデが声を上げるように。「御顔を向けて、わたしを憐れんでください。わたしは貧しく、孤独です」<sup>51</sup>。同じく。「父母はわたしを見捨てようとも、主は必ず、わたしを引き寄せてくださいます」<sup>52</sup>。

ここでルカによる福音書 18 章にあるファリサイ派の人々のように、神の前で自分に固有の正しさを信頼する偽善者についても、触れられなければなりません。このなかで彼らは多くの罪に陥ります。すなわち、自身の弱さを認識することなく、自分が神の前に罰に値することを知らずとも、空しい信頼を有し、仲介者キリストを通じて冀わないがゆえに。むしろ彼らは自らのわざを神の仲介者の場所よりも前に置くのです。こうしたことについては、上に罪の第五の段階に割り当てました。

罪の第十一番目の段階は、我慢できないことです。これは本来第一の戒めに対立します。というのも、意志は罰において神に従うことを拒むからです。ときどきまるで主からより厳しく、あるいは不公平に裁かれているようで、神に対して怒りさえします。そうした情動について、しばしば聖書はわたしたちに、こう忠告します。「怒ることがあっても、罪を犯してはなりません」<sup>53</sup>。つまり、すでに述べたように、苦難のなかで進んで神に従うようになるために、憤りに抵抗し、魂の向きを変えなさい、ということです。

罪の段階を集めてみました。これらは元来より第一の戒めに逆らうものであり、それは容易に認識され判断されることができます。というのも、十戒はすべての徳に関する教への総体であり (summa doctrinae omnium virtutum), わたしたちはそうした徳を個々の戒めに帰することになります。第一の戒めに関わる徳は、あるときには敬虔 (pietas), あるときには信心 (religio) と呼ばれますが、これは神への恐れ (timor Dei), 信仰 (fides) もしくは信頼 (fiducia), 神

への愛 (dilectio Dei) というほうが、より容易に理解されます。確かにこれらのものは、敬虔と呼ばれる徳に必然的に含まれることになります。これに忍耐 (patientia) が関わります。敬虔にはほぼ確たる名称が一致しますが、それは普遍的な正しさ (iustitia universalis) です。これを、神によって目の前に立てられた、そうした命令のすべてにおいて従うことである、と定義するならば、後に述べるように、それは神に従い、すべての行いが神に帰する、というこの目的に向けられていることになります。したがって、普遍的な正しさと呼ばれる、この徳について論じましょう。

## 第二の戒めにいて

まさに第一の戒めでは、神に対する心の動き〔情動〕(motus) について語られています。これは第一の、そして内的な礼拝です。というのも、神は見せかけの服従ではなく、次の言葉通り、心の服従を求めているからです。「あなたは心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい」<sup>54</sup>。同じく。「神を礼拝する者は、霊と真理をもって礼拝しなければならない」<sup>55</sup>。次に、第二の戒めに移り、それを外的に表現することについて語ることにしましょう。というのも、神は知られるようになることを欲し、わたしたちの声によって礼拝されることを望んでいるからです。そして、神は言葉を通じて自らを明らかにしたように、同じようにこの言葉を声によって広げようと望んだのです。したがって、心の動きについて述べられた後、今やその声について命じ、このなかで神の名前と言葉とが響き渡ることになります。

## 神の名をみだりに唱えてはならない

第一の戒めでは、肯定的かつ否定的な言説が置かれています。「わたしは主、あなたの神、あなたをエジプトの国、奴隷の家から導き出した神である」<sup>56</sup>。これは肯定的なものであり、他にも肯定的な言説が加えられます。「あなたは心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい」<sup>57</sup>。同じく。「あなたの神、主を畏れ」<sup>58</sup>。肯定的な言説が立てられて、さらに否定的な、あるいは排他的なものが付け加えられます。「あなたには、わたしをおいてほかに神があってはならない」<sup>59</sup>。このように第二の戒めでは、否定的な言説をわたしたちは耳にして、常に第一の戒めに表現された特別に肯定的な言説を見つめることとなります。ここで神は自らの名前が誤用されることを禁じますが、それにもかかわらずこの声によって広められ知られるようになることを望んでいます。「わたしは主、あなたの神」<sup>60</sup>。したがって、神の名の正しい用法、真の説教、真の礼拝、恩恵による行為や信仰告白が存在するのです。命じられている四つの行いの種類を、わたしたちはここで知り、この場所で、これらの行いに関する肯定的な証言を挿入しておきましょう。例えば「あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしなさい」<sup>61</sup>。「それから、わたしを呼ぶがよい。苦難の日、わたしはお前を救おう。そのことによって、お前はわたしの栄光を輝かすであろう」<sup>62</sup>。「実に、人は心で信じて義とされ、口で公に言い表して救われるのです」<sup>63</sup>。こうした言説は、これらの〔なされるべき行いの〕種類について、もっとも適切に命じています。ところで、宣誓も礼拝に含まれます。と

いうのも、宣誓者は自身の意志の証人となってもらうために、神に祈るのですから。その人は裏切ることが望んではおらず、神がそうした者に報復し罰するように冀めます。そして、自らもこうした罰に結び付いているのです。宣誓することがどれほどの拘束(vinculum)になるか、ここで理解されるわけです。つまり、もしそれを裏切ることがあれば、自分自身のなかで神の怒りが荒れ狂うことを神に願うのですから。人間がこれほど悲惨なことを自らに課することがあるでしょうか。あるいは、これほど自らに大きな罰を負わせることがあるでしょうか。したがって、〔宣誓の〕結果が応えることとなります。というのも、この義務は神の裁きによって、この箇所ですでに定められ確立されているからです。「あなたの神、主の名をみだりに唱えてはならない。みだりにその名を唱える者を主は罰せずにはおかない」<sup>64</sup>。したがって、この世の生においてすら、嘘つきには過酷な罰が付いて回ることになるのです。

### この戒めはどのように行いうるのか

ところで、前に述べたように、第一の戒めのわざは神の子の認識と信仰を抜きにして行えるものではありません。ここでも同様に考えられるべきです。キリストという仲介者なしに礼拝が行われることは不可能であることは十分明らかです。恩恵による行いについても同じように考えられなければなりません。同じく宣教においても神の子についてなど、福音が伝えられることが確かに必要です。要するに、上に述べたように、まず神の子を通じて与えられた和解が得られなければならず、その後、まさに喜んで服従が開始されるのです。同じことが他の戒めについても考えられなければなりません。そして、他の戒めのわざも、畏れと信仰という第一の戒めのわざが先行する場合に、神に喜ばれかつ神の礼拝となるのです。このようにして残りの戒めのわざは喜びの犠牲となり、神に喜ばれるものとなりますが、とくに第二の戒めのわざがまさにそうなのです。とりわけこうした種類のことについては、次のように記されています。「あなたに感謝のいけにえをささげよう、主の御名を呼び」<sup>65</sup>。

### 第二の戒めに対する罪

これとの対立は、すでに戒められたものと同じで、前に検討された、心の悪徳とともに述べられます。ゆえに、この命令とエビクロス派の言説、不敬虔な者による外的な礼拝、不敬虔にも悪魔や偶像や死者を礼拝すること、誤った教え、偽証、不正な弾劾、アイヤクスが神なしにも勝つことができると自ら述べたような、傲慢な話や我慢ならない宣誓がそれです。同じくもっとも慣習的な悪は、神の名や宗教的感情を口実にし、不正な情欲や野心や貪欲や性欲や憎悪といったものへの福音を口にすることです。教皇は下僕の名の下で権力を追求し、不正な戦争を起し、無限の金を得ようとし、偶像やその他のものを作り上げました。同じように今の世代は、福音の名の下に、さらにしばしば私的な貪欲を隠します。こうした誘惑はすべての者に及び、これは弱い精神や信仰を傷つけて活力をなくさせ、福音からある人々の意志を遠ざけたりするのです。

二つの内どちらの戒めにも、もっとも過酷な威嚇が付け加えられます。身体的な罰について

述べられているとき、永遠の怒りが意味されていることさえあるのです。というのも、律法は罪の赦しを約束せず、悔い改めをしない者に対しては、福音書のなかで永遠の怒りが向けられることがはっきりと公言されているからです。「呪われた者ども、わたしから離れ去り、悪魔とその手下のために用意してある永遠の火に入れ」<sup>66</sup>など。というのも、ここでは三代そして四代にまで荒れ狂う罰について語られていて、それが身体的なものとして理解されるからです。そして、こうした前の戒めに罰が加えられるように、同じように続くものにも罰が加えられるのをわたしたちは知ります。申命記 27 章にあるように、すべての戒めに対して呪いが付加されているのです。この世での災難がすべての人類の過失による罰であることを疑ってはなりません。詩編のなかでいわれている通りです。「あなたに罪を責められ、懲らしめられて、人の欲望など虫けらのようについでます。ああ、人は皆、空しい」<sup>67</sup>。

### 第三の戒めについて

第一の戒めでは内的な精神、意志、そして神に対する心のわざについて教えられ、第二の戒めでは外的な表明について教えられました。同じように、この第三の戒めでは神によって立てられている儀式についての教えが伝えられているのですが、これらの独自の目的が理解されなければなりません。儀式 (ceremonia) は教えるという務めのために存在しているのであって、この働きのための道具なのです。ゆえに、安息日に関する戒めは、まず教えることの務めと、神によって立てられた儀式の遂行について述べるのです。テキストは休息についてだけではなく、特別に聖化について語っています。戒めは聖なる日に、つまり、とくに神が述べたわざが生起するのを望んでいます。これは、人々が教えられることであり、神によって立てられた儀式が実践されることです。そのためにある日が定められているのです。この原理となる内容は、すべての人々とすべての時代に及びますが、それは自然法であるからです。その他の七日についての慣習は、レビ族の儀式が廃止されて成立したもので、この儀式もまた変化するものです。コロサイの信徒への手紙 2 章にはっきりと述べられているように<sup>68</sup>。したがって、第三の戒めにおいても、これが二つの部分から成り立っているといえます。一方は自然の、あるいは道徳の、あるいは一般の法であり、他方は七日に関する、とくにイスラエルの人々に固有の儀式の法です。前者の法に関しては、自然で一般的なものであり、永遠かつ破棄されるものではないといえます。すなわち、公に奉仕することを保つのに関する命令であり、ちょうどいつか来たる日に、人々が教えられ神によって立てられた儀式が実践されるようになるためです。しかし、七日について語られている特殊な法は、破棄されます。

ゆえに、ここでわたしたちは、この戒めによって神が立てた公の務めと儀式とが保持されることを学びます。というのは、神は教会が保たれ広められていくために、これを保持することを望んでいるからです。エフェソの信徒への手紙 4 章にあるように。「そして、ある人を使徒、ある人を預言者、ある人を福音宣教師、ある人を牧者、教師とされたのです。こうして、聖なる者たちは奉仕の業に適した者とされ、キリストの体を造り上げてゆき (中略)、人々を誤りに導こうとする悪賢い人間の、風のように変わりやすい教えに、もてあそばれたり、引き回さ

れたりすることなく」<sup>69</sup>。つまり、神は預言者や使徒を通じて確かな言葉が公に広められるようにこれを与えているのであり、確たる証言が付加されています。こうして公の機関(*ministeria publica*)が立てられているのであり、このなかでその言葉は響き渡ることになります。その結果、わたしたちは神について確か教えを得ることになり、異邦人のように自ら新しい宗教や新しい礼拝を考案することもなほなくなるのです。ここで神からの賜物だけを愛し、敬わなければなりません。そして、それぞれの場所でこれを助けなければなりません。キリストがいうように「あなたがたに耳を傾ける者は、わたしに耳を傾け、あなたがたを拒む者は、わたしを拒むのである」<sup>70</sup>。それどころか安息日での孤独を嘆く預言者は、教える務めがないことに不平をいいました。したがって、この戒めのわざは、この務めによって敬虔に果たされます。それは、正しく教えるのを聞くことであり、 sacrament を敬虔に用いることであり、それらの活用を、わたしたちの手本と大勢によって助けることであり、正しい教えに従うことであり、敬虔なる教えを育成し、これを敬意によってもたらし、守ることであり、教会に必要な研究を助けることなのです。わたしはこの戒めの寓喩を求めませんが、これに固有で独自の意味を伝えたいと思います。というのも、神によって立てられた務めを維持することは、決して軽くて取るに足らない仕事ではないからです。

この戒めに対する罪は、これです。正しく教える義務を放棄したり破棄したりすること、間違いを教えること、儀式を歪めること、そこで教会が正しく教えられるところの集会での公の務めに全くか、まれにしか出席しないことです。同じように、不敬虔によって汚染されていない公の務めから、他のやり方や異なる仕方に引き出すこと。ちょうどドナトゥス派がその集会を離反させたように。真の教えの務めに従わないこと、卑しい行いをする事、つまり、公の務めのために立てられた日に、それを妨害すること、そうした日を遊びや放蕩やその他の悪徳に費やすこと、軽蔑すること、敬虔な務めに対して暴言を投げかけること、これを支え守るために寄付しようとしないうこと、もし教えにおいて健全だけれども、その弱さを守ろうとしないうこと。ちょうどハムが裸の父を嘲笑うように。また、教会の勉学を援助しないこと。

さらに、前に述べたように、第一の戒めは残るすべてのものに含まれているべきなのですが、それは神による命令だからであり、神は創始者として認められ、それへの服従に戻ることが必要とされています。したがって、神への畏れと信仰とは、他のわざの命と同じく、他の戒めによるすべてのわざのなかに存在していなければなりません。それゆえに、この戒めのわざを成し遂げるために、さらに神の子の認識が付加されなければなりません。それは信仰と神への祈りのなかで、わたしたちがこの戒めに従うことができるようになるためです。同じく、この戒めは務めと儀式について語っているため、福音が含まれなければなりません。というのも、律法の務めは死の役割だけですが、福音はまさに罪の赦しと神の子による永遠の命とを告知するからです。同じく、神によって立てられた儀式とは、キリストの形です。したがって、ユダヤ人は真のキリストの認識を欠いていたため、この戒めのわざを正しく行うことができませんでした。そして、修道士や犠牲を捧げる祭司においては、信仰や真の祈り、正しい礼拝についての教えに無知なため、その儀式において数多くの罪に走ってしまいました。人間によって伝え

られたわさが礼拝であると誤って考えてしまったのです。主の晩餐はさまざまに歪められてしまい、これらの悪徳そのものによって儀式は疑わしいものとなってしまいました。さらに、こうしたことによる罪はこの〔第三の〕戒めとも相争い、安息日を汚してしまったのです。

第一の戒めを含む徳というものは、第二そして第三の戒めまで及ぶのです。

(次に続く)

## 注

- (1) マルコによる福音書, 12:30。
- (2) マルコによる福音書, 12:31。
- (3) 出エジプト記, 20:17。
- (4) 申命記, 27:26。
- (5) マタイによる福音書, 25:41。
- (6) マタイによる福音書, 5:17。
- (7) ローマの信徒への手紙, 7:14。
- (8) 申命記, 6:5。
- (9) レビ記, 18:6ff。
- (10) 詩編, 130:3。
- (11) イザヤ書, 1:10ff。
- (12) イザヤ書, 54:13ff。
- (13) サムエル記上, 15:22。
- (14) ホセア書, 6:6。
- (15) マタイによる福音書, 22:39。
- (16) ペトロの手紙一, 2:5。
- (17) 出エジプト記, 20:2。
- (18) ヨハネによる福音書, 1:18。
- (19) ヨハネによる福音書, 14:9。
- (20) マタイによる福音書, 11:27。
- (21) ヨハネによる福音書, 16:23。
- (22) ヨハネによる福音書, 16:23。
- (23) コリントの信徒への手紙一, 1:21。
- (24) ヘブライ人への手紙, 4:16。
- (25) 出エジプト記, 20:5。
- (26) 申命記, 6:13。
- (27) 出エジプト記, 20:6。
- (28) 申命記, 6:5。
- (29) 申命記, 6:5。
- (30) ローマの信徒への手紙, 8:7。
- (31) 出エジプト記, 20:1。
- (32) ローマの信徒への手紙, 10:4。

- (33) マタイによる福音書, 16:24。
- (34) ローマの信徒への手紙, 8:29。
- (35) 詩編, 116:15。
- (36) ペトロの手紙一, 4:17。
- (37) コリントの信徒への手紙一, 10:10。
- (38) ペトロの手紙一, 5:6。
- (39) 詩編, 51:19。
- (40) 詩編, 37:5。
- (41) 詩編, 4:6。
- (42) ペトロの手紙一, 4:17。
- (43) コリントの信徒への手紙一, 11:32。
- (44) フィリピの信徒への手紙, 4:7。
- (45) レビ記, 20:6。
- (46) マタイによる福音書, 17:5。
- (47) マタイによる福音書, 13:3 以下。
- (48) ダニエル書, 4:3 以下。
- (49) 列王記下, 18-19。
- (50) ルカによる福音書, 16:15。
- (51) 詩編, 25:16。
- (52) 詩編, 27:10。
- (53) エフェソの信徒への手紙, 4:26。
- (54) 申命記, 6:5。
- (55) ヨハネによる福音書, 4:24。
- (56) 出エジプト記, 20:2。
- (57) 申命記, 6:5。
- (58) 申命記, 6:13。
- (59) 出エジプト記, 20:3。
- (60) 出エジプト記, 20:2。
- (61) マタイによる福音書, 28:19。
- (62) 詩編, 50:15。
- (63) ローマの信徒への手紙, 10:10。
- (64) 出エジプト記, 20:7。
- (65) 詩編, 116:17。
- (66) マタイによる福音書, 25:41。
- (67) 詩編, 39:12。
- (68) コロサイの信徒への手紙, 2:14 以下。
- (69) エフェソの信徒への手紙, 4:11 以下。
- (70) ルカによる福音書, 10:16。